クレア・クーパー・マルカス
（カリフォルニア大学バークレー、名誉教授）
**Clare Cooper Marcus**;
Professor Emerita,
University of California, Berkeley

# ヒーリングガーデン
## Healing Gardens

トリニティホスピス（イギリス、ロンドン）にあるガーデンシェルター。病院の本館から離れてプライバシーを楽しむための空間。患者、スタッフ、訪問者によく利用される

北アメリカとイギリスの病院の屋外空間は、伝統的なイギリス郊外の散策用の庭、中庭、家庭の庭、裏庭、キッチンガーデン、屋上ガーデン、都市公園、広場、ショッピングモール、植物園のような都市のオープンスペースなどがモデルになっている。これらのモデルは多かれ少なかれ、医療の環境に適している。さまざまなケーススタディが、クレア・クーパー・マルカスとマーニー・バーンズ の『ヒーリングガーデン：セラピックベネフィット・デザインレコメンデーション（治療効果とデザイン）』（New York: John Wiley & Sons, 1999）に著されている。

この本が説明するガーデンデザインの理論は、健康回復のための環境=医療環境での庭として効果的であるためには、安心を感じること、少なくとも次の4つの特性が必要であると説明する。1.自然との触れ合い（植物、花、樹木、水、野草など）2.軽い運動のための機会（散策路、散策の誘発）3.社会的触れ合い（ベンチ、移動できる椅子など。病院のスタッフと会える環境など）4.プライバシー（患者、訪問者、病院のスタッフが静かに一人になれる環境、瞑想できる環境）であり、病院のガーデン、治療のためのガーデン、ヒーリングガーデンが評価を得るには、これらのすべてが必要不可欠な構成要素であるということを述べている。

最近の傾向の一つには、患者の服用する薬品が庭の薬草からできていることを知れば、治療に対してより好感を持つことができるだろうと考え、薬草にラベルを付ける試みなどがある。

患者は病院でかなりのストレスの下に置かれている。美術館でリラックスして美術を鑑賞するときとは異なった知覚になる。ストレスがこれらのアートを最悪なものに見せる場合がある。高い石の壁は墓石に見え、抽象的な鳥の彫刻は生肉を食らう禿げ鷲に見える。したがって、病院のガーデンに置かれるアートの選択には十分な注意が必要であり、インテリアはかなり明るいイメージでなければいけない。人間と自然をモチーフにしたアートなどが好ましい。

ヒーリングガーデンの章はデザインについてのアドバイスと病院、精神病院、看護ホーム、アルツハイマー患者の施設、小児病院、ホスピスなどのケーススタディについて書いている。この章は、将来必要とされるリサーチについて提議している。例えば、高齢者、アルツハイマー患者の環境のニーズについてはリサーチが進んでいるが、癌や心臓病などの患者のためのニーズについてはいまだリサーチがされていない。

マルカスの著書の二冊は日本語に翻訳されているが日本語の正式な書名は不明。

『人々を中心に考える住宅設計 —— 中密度住宅のための敷地計画ガイドライン』ウェンディ・サキシアン共著
(with Wendy Sarkissian), Berkeley, CA: University of California Press, 1986.

『人々と空間——都市オープンスペースのデザインガイドライン』キャロリン・フランシス共著
(with Carolyn Frances), NY: John Wiley & Sons, 1998.

アルツハイマー患者のためのガーデン。楽に散策できるシンプルな動線と手すり。グレアを避けた色彩のコンクリート舗装。背もたれと肘かけのあるベンチなど様々な工夫がなされている

トリニティホスピスにあるスイレンの池と彫刻が、物思いにふける時間を与えてくれる

滝のすがすがしい音が患者やスタッフの心を癒す（イギリス、ウエストドルセットホスピタル）

**【感想】**健康な状態であるときよりも病気であるときの方が周りの環境から受けるストレスに弱いということが、意外に長い間注意を払われないままきたのではないかと思わされる。病院へ出かけて、待合室で待っているだけで気が滅入って病気になりそうだとか、相部屋に入院してプライバシーがなく恥ずかしい思いをしたとかいう話も珍しくない。自然、庭という媒体を通して、病院の非人間的になりがちな環境を日常の環境へ近づける機会をつくる、さらに患者の繊細さを前向きな方向で活かす、という試みと思われた。心の弱ったときには日常目に止めなかった植物の芽吹きも生命の息吹きに思えるのではないだろうか。ヒーリングガーデンはマルカス教授の専門とする分野の一部であり、実際には社会学的また心理学的な視点から「人と空間」を専門とする。彼女はイギリス人であり、アメリカで勉学を終え自国へ帰ろうとしたところ、人と空間の関係を扱っている人がいないから教えたらどうかと引き留められてもうアメリカでの生活が長いとのことであった。以前ランドスケープデザイン誌に載せた「コペンハーゲン市：魅力あふれる歩行者のためのまちづくり」で取り上げたヤン・ゲール氏の“人の活動と空間に関する研究”もアメリカで評価され賞を受けた。アメリカでの人間性、精神的豊かさを中心にしたランドスケープ空間に対するあこがれは強いようだが、それをいかに実際の形にしていくかが大きな課題である。（岩田明子）

この噴水のデザインは心臓の形からとられ、その水の打つ音は鼓動と同じリズムを再現する（イギリス、ロンドンのロイヤルブロンプトンナショナルホスピタル）

# セラピューティックランドスケープ：その歴史、デザイン、適用

## The Therapeutic Landscape: History, Design, and Application


マーク・B．エプスタイン
（ASLA、デビッドエバンズアンドアソシエーツ）

ジェーン・ステファン・カバナフ
（FASLA、テキサス工科大学準教授）

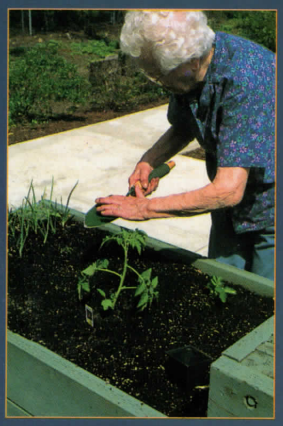
テレシア・ハンセン
（公認園芸セラピスト、レガシーグッドサマリタンホスピタル＆メディカルセンター）

ナンシー・ガーラチースプリングス
（ストレイティブ・ガーデンズ：ヒーリングランドスケープの著者）

クレア・クーパー・マラカス
（カリフォルニア大学バークレー校　建築・ランドスケープアーキテクチャー学科名誉教授）

マーニー・バーンズ
（デバ・デザインズ、ヒーリングガーデン：セラピューティック・ベネフィットアンドデザインレコメンデーションズ、マラカス氏との共著）

**Mark B. Epstein**; ASLA, David Evans and Associates
**Jean Stephans Kavanagh**; FASLA, Associate Professor at Texas Tech University
**Teresia Hazen**; Registered Horticultural Therapist, Legacy Good Samaritan Hospital & Medical Center
**Nancy Gerlach-Spriggs**; author of *Restorative Gardens: The Healing Landscape*
**Clare Cooper Marcus**; Professor Emerita in the Departments of Architecture and Landscape Architecture at the University of California, Berkeley
**Marni Barnes**; Deva Design, co-author with Cooper Marcus of *Healing Gardens: Therapeutic Benefits and Design Recommendations*

20世紀における医療の発達は治療というものをむしろ治療以外のものにしてしまった。患者は治癒力に頼ることから科学的に訓練された看護婦や医者の助けを求めるようになった。病院のデザインは新しいテクノロジーを取り入れることができるように変化し、医師や看護婦のための効率の良さを助けるように計画された。デザインは患者のための環境からは遠いところへと移行してしまったのである。

ここにきて、ある変化が起こった。多くの都市において、民間ばかりでなく公共の施設でも患者の心の癒しに注目したセラピューティックガーデンがつくられていることである。

### ケーススタディ：レガシー・ヘルスシステム

アメリカの園芸療法協会は1995年に「セラピューティックランドスケープ」を提案した。これはオレゴン州ポートランドのレガシー・ヘルスシステムホスピタルの二つのセラピューティックガーデン、グッドサマリタンホスピタルのヒーリングガーデン、エマニュエルホスピタルのチルドレンガーデンの開発のための理論的フレームワークとして役立つことになった。

セラピストは患者とともにそれぞれのセラピーの目的を果たすために、水をやるなどの作業を利用する。言語病理医師は認識力、コミュニケーションの治療のためにガーデンを利用する。レクリエーションセラピストは音楽、また他の社会的プログラム、散歩、バードウォッチング、適応性ガーデニングストラテジーなどのガーデンのいろいろな利用法を開発している。園芸療法士は患者の強さ、忍耐、可動性、注意力、記憶などを促進するため、適応性ストラテジーを用い、また患者の新しい余暇に対する興味を促進するためにガーデンを使用する。レガシーでのガーデンセラピーにおける特徴を以下に挙げる。

1）アクセスの改善をすることでアルツハイマーの患者はスタッフと植木鉢の植物の手入れを座った状態や持ち上げられたベッドで楽しむことができる。子供もまたそのようなベッドや車椅子のまま植物の世話をすることができる。レイズドベッドなどは脊椎を患った患者などにとって難しい作業も可能にし、ヒーリングガーデンへ手を伸ばすことができるようになる。力の弱いお年寄りは車椅子を利用し自分でガーデンの入口まで動かして行くことも可能である。

2）ガーデンのスペースとその活動の範囲の境界はガーデンの使用者の関心とエネルギーを管理するためにはっきりさせること。

3）人々と植物の相互関係の豊富さが不可欠である。みずみずしい状態の豊富な植物のコレクションは園芸セラピーとガーデンを利用する人々にとって重要である。

4）セラピーでは可動性、動く力、社会的接触、認識能力、情緒などの回復に焦点が当てられる。一般的な福祉としては、遊び、リラクゼーション、社会的交流、教育、創造性などに焦点が当てられる。

5）健全なコンディションであること。植物は様々な特徴、病気、害虫などの点も考慮して選び、化学薬品による危険を極力避けること。

6）病院のガーデンの環境は、使用者の能力に応じてガーデニングに参加できる範囲をできるだけ広げるようにデザインし、プログラムを組むことが大切である。一般にセラピューティックガーデンは、視覚ばかりでなく視覚に関係する記憶、聴覚、触角、嗅覚、時には味覚を含んだ広い範囲の五感に関わるものである。

7）病院でのセラピューティックガーデンはシンプルで、統一された場所でなければならない。

### セラピューティック空間のデザイン要素

病院のガーデンの調査では、スタッフ、訪問者、患者に野外へのアクセスを提供した点に価値が見い出された。ガーデンの要素でもっとも有効と思われたのは、樹木、植物、花、香り、鳥のさえずりや水の音、日光やそよ風といった感覚に訴える生命や健康を表わすものであった。これらの要素は癒しを与えるばかりでなく、病院の室内の環境から一時離れ、それとは対照的な環境を体験することができる。

ガーデンの効果の制約はガーデンのロケーションについての情報の不足、アクセス、特定の患者のための可動性の悪さ、騒音や花粉アレルギーなどの悪影響、喫煙あるいは新鮮な空気を好むなど使用者の異なるニーズにより場所の共有が難しい場合など、誤解を招くようなあいまいな解釈を引き起こすデザイン要素は問題がある。このデザイン要素は、病院の環境においては特に重要となる。多くの使用者である患者の感情はとてもデリケートになっており、はっきりとしたポジティブな刺激でない限り、多くのものからネガティブな解釈をするからである。

これらのガーデンデザインの理論は、ロジャー・ウリッチによって、患者、スタッフ、訪問者のストレスを減らす助けとなるよう考案したデザイン要素のモデルを基に開発された。この理論は、病院のセラピー効果を促進するであろうガーデンの要素を、自然へのアクセス、運動のできる機会、社会的交流の促進、コントロールの可能な度合を4つに分けている。これらの基本的な基準に加えて、病院環境におけるガーデンは、患者の種類によって特別なニーズに合うようにつくられなくてはならない。これは患者とその家族、スタッフと管理者がチームになってデザインするのがもっとも良いと考えられる。

レガシー・グッドサマリタンホスピタルのヒーリングガーデンプラン

レガシー・グッドサマリタンホスピタルのヒーリングガーデン（左：建設中、右：完成後）